美術部の文化祭企画

～助成金事業活動報告～

田中　優子・青柳　泰生

本校は 2020 年 3 月から 5 月末までコロナ禍のために休校となり、授業同様、部活動も行えなかった。美術部も毎年目標としていた高校生国際美術展に向けて制作していた作品が間に合わず、今年は応募を断念した。全国でも大会や展覧会の中止等で多くの児童・生徒が落胆し、あるいは悔し涙を流していた。そんな中で再開した本校美術部は、「芸術はコロナに負けない」というメッセージを、指文字を模った石膏像をパーツとした作品を通して全国の聾学校に発信しようという企画を立ち上げ、部員達と教員が一丸となって作品制作に取り組んだ。大きな企画を成功させるために外部資金を得て、高等部の生徒達や高等部以外の部局の児童・生徒にも協力を呼びかけて活動する中で、部員達の心の成長も見られた。聾学校ならではの造形作品制作を通して得たものは大きい。本稿では、その取り組みと成果について報告する。

キー・ワード：部活動　美術部　コロナ禍　指文字　石膏像　聴覚特別支援学校

1　はじめに

本校高等部普通科では部活動を全員入部制とし、教育の一環として考えている。週に 3 回活動し、普通科の教員と専攻科造形芸術科の教員 2 名が指導に当たっている。使う画材は自由だが、現在は主に油彩画を制作している。年に 2 回、「高校生国際美術展」と、地元で開催される「いちかわ未来の画家展」に応募している。また、毎年文化祭では作品を展示し、学内外合わせて 300 人くらいの来訪者がある。

しかし、今年はコロナウイルス対策のため学校が休校となり、部活動が行えなかったため、毎年応募している夏の「高校生国際美術展」までに作品を完成させられず、また、秋に開催される「いちかわ未来の画家展」は中止となった。文化祭も行えるかどうか 1 学期には学校の方針が決まらず、また、行えたとしても美術部の生徒の作品が揃わない中でどのような形で展示ができるか、部員も顧問も見通しが立てられずにいた。

全国の高校生達も同じ状況だった。春の選抜高校野球も夏の甲子園大会も中止になり、高校球児達が涙を流す様子やインターハイが中止になって肩を落とす選手達の姿がテレビで放映された。同じ思いをしている人達がたくさんいる。そんな中で自分達にできることはないかと考え、作品を通して「芸術はコロナに負けない」という姿勢を発信することを思いついた。コロナ禍のさなかでも芸術活動で心を豊かにすることはできる。文化祭に個人の作品を展示するのは作品数が揃わないため諦めるしかないが、大きな作品を共同で 1 つ作り、それに自分達のメッセージを込めて見てもらう。それが今の自分達にできることだと考えた。聾学校の美術部が発信するメッセージには指文字を使うのがふさわしい。文化祭が開催できなくても学校の HP に作品の写真を載せて発信しよう、諦めない姿勢を見せよう、という気持ちが生まれた。大きな作品制作に必要な費用を捻出するために外部資金に頼ることを思いつき、普通科顧問が企画書を書き、社団法人芳心会の助成金に応募し、「芸術の振興」を目的とした助成金、22 万円を得ることができた。例年より早く 3 年生が引退したため、部員は 2 年生 2 名のみだったが、新しい目標を得て活気を取り戻した部員達は、9 月から早速活動を開始した。

2　企画の概要

企画の概要は次のとおりである。

① Fig.1のメッセージ91文字分の指文字を模った手の石膏像を作り、それらを組み合わせて大きな立像を制作する。その立像全体でメッセージの内容を表現する。その作品を学内に展示し、学校のHPで発信する。

② 指文字の石膏像は普通科の生徒全員に1つずつ型を取らせてもらい、足りない分は他の部局に協力依頼する。特に促音「っ」、拗音の「ょ」は小学部の児童に協力を依頼する。

③ 型取りから石膏像作成まで、誰でも簡単に行える「石膏型取りキット　モデリアル（美濃粘土）」を使う。

わたしたちはコロナウイルスに負けません。 失われた大切な毎日。 不安や落胆や諦め。 しかし、無くしてもまたつくりましょう。 新しい未来を力を合わせてつくっていきましょう。

Fig. 1　メッセージ

3　活動内容

(1)　立案と協力要請

8月末、2学期が始まってすぐに助成金が交付された。教員サイドでは高等部普通科全体と各部局に活動内容の説明と協力依頼を行い、部員は生徒会に話を通した上で普通科生徒全員に朝礼で協力を呼び掛け、生徒用玄関に「文化祭企画　指文字の石膏像を作ろう大作戦！（美術部）」と題したポスターを貼った。また、普通科の生徒に手の型取りを頼む場合、それができる時間は放課後のみだが、放課後は部活動があるので、部活動の時間に抜けてきてもらわなければならない。それぞれの部活動の時間を割いて協力してもらうためには、活動の意義をしっかり説明して、各部毎に動いてもらう必要がある。そこで、部員達は部活動の中心となる2年生の学年会で美術部の企画について説明をさせてもらい、協力を呼び掛けることを思いつき、実行した。

(2)　型取り

その甲斐あって、普通科全体で協力しようという空気ができ、また、各部の顧問の協力も得て、まず野球部がまとまって型取りに来てくれ、他の部もそれに続いた。3密を避けるため、型取りも放課後の時間を30分ずつ3つの時間帯に分け、入れ替え制にして、2週間かけて行った。型を取ってもらったら、部員が次々に石膏液を流し込んで固めていく。顧問2名と、9月から来ていた美術の教育実習生も手伝って、毎日10体前後の石膏像を作成した。

他部局からは、高等部専攻科の生徒数名と小学部の児童会の協力を得た。専攻科歯科技工科からは石膏の扱いについて助言をもらっただけでなく、技術指導をしてもらい、道具も貸してもらい、大変ありがたかった。また、制作中も時々部員達の様子を覗きにきてくれたので、部員も顧問も励みになった。小学部はコロナ禍で児童会の行事も中止になったりしていたので、美術部の企画に参加できれば子供達も喜ぶとのことで、快く参加してくれた。小学部は高等部との接触を避けていたので、子ども達に型取りに来てもらうわけにはいかなかったが、小学部の教諭が型取りだけでなく、石膏像制作まで、指導して行ってくれた。そして、子供達の小さいながらしっかりした手の石膏像が出来上がった。この期間は部員も顧問も他学部との協力を濃密に感じられた。部員達は協力してくれた専攻科と小学部の児童・生徒に宛ててお礼の手紙を書き送った。

(3)　立像制作

2週間かけて91体の指文字の石膏像を作成し、いよいよ立像制作に取り掛かった。立像のデザインは部員がイメージ画を描き、それを専攻科美術教員の顧問がデザイン画に描き起こし、木の骨組みを作った。あとは部員と顧問で骨組みにペンキを塗り、石膏像の数と同じ91個の穴を空け、予め棒を付けて固めておいた指文字の石膏像をその穴に差し込んで固定していった。

立像はメッセージの内容に合わせて3つに分けて作り、その3つで1つの作品とした。Fig.2に示したパーツ1は「コロナウイルスに負けない」という

気持ちを上に真っすぐに突き上げた手の形で表現し、Fig.3 に示したパーツ 2 はなかなか上にあがっていけず地を這うイメージで、自粛中の辛い気持ちを表現した。そして Fig.4 のパーツ 3 では、上に向かって花のように開いていく形で、辛いことを乗り越えて、今できることをして前に進もうという気持ちを表現した。3 つを合わせた全体像は Fig.5 に示す。

Fig. 2　パーツ 1

Fig. 3　パーツ 2

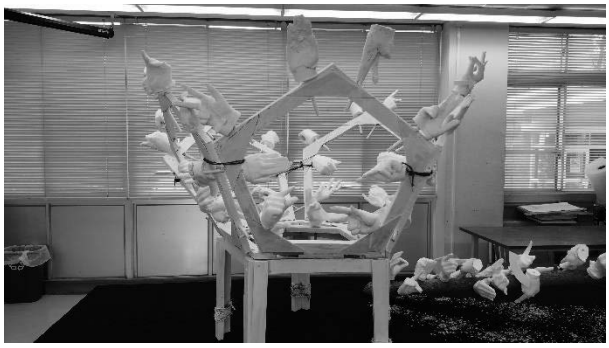

Fig. 4　パーツ 3

Fig. 5　全体像

(4)　展示と発信

文化祭は中止にはならなかったが、校内のみで行うこととなった。美術部は通常は部員達の個人制作と全員の共同制作を展示するが、今年度は指文字の立像のみで部屋をいっぱいにした。高等部普通科の生徒達はほとんど全員が型取りに協力したので、自分達の手を模った石膏像がどのように姿を変えたのかを興味を持って見に来た。そして、それぞれがかなり長い時間をかけて作品を鑑賞している様子が見られた。小学部の児童は今年度は接触を避けて高等部の校舎と行き来をしないことになっていたので、文化祭中は校内専用の HP サイトで作品と生徒達の映像を流して観てもらい、文化祭終了後に教員達が小学部の校舎に作品を移動して展示した。

また、外部に向けては学校の HP で「全国の聾学校へ届け!!私達の思い　2020 美術部文化祭企画」と題して今回の企画を紹介し、メッセージを発信した。更に美術部部長の生徒が 12 月 13 日の「共生社会を目指す芸術・文化交流の集い」で今回の文化祭企画について発表した。

4　今回の活動の成果と意義

(1)　部員の成長

今回の活動を通して部員の著しい成長が見られた。普段はおとなしいイメージの文化部である美術部が中心となって大きな企画を立ち上げ、普通科の生徒達に協力を呼び掛ける。最初の朝礼で普通科全生徒の前に立ったときは足が震えたそうだが、2 回、3 回とそういう経験を重ねることで部員の 2 人が自信を深めていく様子が見て取れた。2 年生の学年会で説

明をした後、部長が涙ぐむ場面もあったので、よほど気が張り詰めていたのだと思われる。しかし、2年生を中心に各部で協力する空気を作ってもらえたため、その後の進行がスムーズになった。型取りの日程を表にして廊下に張り出し、生徒達に希望する日時の枠に名前を書いてもらい、人数調整をした。生徒への企画説明の仕方や、型取りの日程調整なども部員2人が相談して管理し、顧問と連携しながら、どんどんアイディアを出していった。やってきた生徒達に型取りの仕方を教え、複数の生徒達に顧問と共に目を配り、先輩である3年生達にも指示を出しながらてきぱきと動いた。大きな企画を自分達で成功させるために主体的に動き、目標に向かって企画が形になっていくことに自信を深め、より積極性を増していった。また、型取りが終了した後も他の生徒達から進捗状況を聞かれたり、展示した作品について様々な感想が寄せられるのを見聞きして、普段あまり美術に関心がない生徒達にも興味・関心を持ってもらえたことに喜びを感じていた。更に、普段接点のない専攻科や小学部からの協力に勇気付けられ、感謝する様子が見られた。

『【総則編】高等学校学習指導要領解説』では、部活動について「生徒自身が活動を通して自己肯定感を高めたりするなど，その教育的意義が高いことも指摘されている」とし、「スポーツや文化及び科学等に親しませ，学習意欲の向上や責任感，連帯感の涵養，互いに協力し合って友情を深めるといった好ましい人間関係の形成等に資するものであるとの意義があること」が学習指導要領で規定されていると説明している。今回の活動を通して、部員の2人は大きな企画をやり遂げることで自己肯定感を高め、責任感を深め、また、多くの児童・生徒から協力を得ることで人間関係を広げられたと考えられる。

(2)　他部局との心の交流

上記のように、高等部専攻科の生徒や小学部の児童会の協力を得たことは部員にとっても顧問にとってもうれしいことであった。小学部の子供達が、文化祭では中学部・高等部が中心になるので、今回のような大きな企画に参加すると、文化祭に参加しているという実感が高まるという話を聞かせてもらい、自分達の活動が小学部の子供達にも喜ばれるということが二重の喜びとなった。普通科の教員達が小学部に文化祭後に作品を運んで行ったときも、小学部主事が作品の3つのパーツに込められた意味を口にしたので、HPを見て覚えてもらっていたのだと知り、顧問もとてもうれしく感じた。また、専攻科歯科技工科から顧問が技術指導を受け、部員達に伝えたが、忙しい中、快く時間を割いて協力してもらったことで、顧問にとっても部員にとっても歯科技工科が今までよりも一層近しい存在として感じられるようになった。このように、今回の企画を通して部員も顧問も他部局をそれまでよりも近い存在として考えられるようになった。

(3)　教育実習生との交流

文化祭前の9月は美術の教育実習生が来ており、放課後の部活動は美術部顧問が指導担当になった。例年は部員が制作しているのを見ているだけなのだが、今年は次々にやってくる生徒達の手の型取りをし、石膏液を流し込む作業を一緒になって行った。その中で部員や顧問とも連帯感を増し、信頼関係も持てた。実習生は女性であったが、実習期間が終わって去るときに、部員が活動中に涙を流したときのことを、「あの涙は美しい涙でした」と語り、「良い経験ができた」と言って去って行った。忙しく部員と一緒に活動しながら、研究授業の準備もし、濃密な時間が過ごせたようである。また、そうした中で、実習生も部員の生徒達と深く触れ合い、手ごたえを感じて成長できたのではないかと推測する。

(4)　聴覚特別支援学校の美術部として

今回の制作活動においては、その作品が聾学校ならではの造形作品であったことに何よりも意味があった。コロナ禍により多くの人が制約を強いられる中、聴覚特別支援学校においても例外なく通常の教育活動が阻害されている。学校再開当初はマスクも口形が見えるように手製の透明な素材のものも考案されていたが、生徒同士はいまだに完全にマスクを外した状態で話しをすることはできずにいる。そう

した状況の中で、手話や指文字などでお互いに活発なコミュニケーションをとろうとする生徒達にはたくましさを感じている。制約の中にいることを逆手にとった結果として、指文字を立体作品の素材とする発想が生まれたことはごく自然な流れかと思われる。また、特別支援学校の中にいる生徒は、通常は教員をはじめとした外的な支援がなされる中での活動が多く、受け身な態度になりがちな面が見られる。しかし、自分達が得意とするものに着目し、外部に対してその強みを生かした作品を制作したことは、大きな成果であったと思われる。

立体制作は素材の吟味をはじめ、大きさ、量感、空間に表す動勢、展示方法に至るまで平面制作に比べて考えるべき要素が多い。さらに今回の場合は、多くの生徒に対して作品のテーマや手順等を説明し、協力させる活動が加わることでその活動の難易度が上がった。しかし、こうした外的な支援として普段は意識せずにいたことも、自分達で行わなければならないことに気づけたことは、重要な点である。生徒にとって意識の外の事柄を知ることは飛躍的な成長にもつながり、他の学習経験と関連付けて、自らの知識として定着させていくことができる。

美術や芸術が社会に対して働きかける役割は近年劇的なスピードで変わりつつある。一部の限られた人々にのみ享受されていた芸術から、社会的なテーマをはらんで公共の場で展開されるまでに至っている。こうした流れはITの登場により、さらにその性格を変化させ続けている。これらのことを専攻科顧問から、振り返りの際に生徒に話して聞かせ、本活動がその疑似的な体験となっていることを説明した。生徒は興味深い様子で聞き、さらに関心をもったようであった。

5　終わりに

本校美術部は自分達固有の部室は無く、多目的実習室を放課後のみ使用している。日頃の活動に必要な用具さえも、手狭な収納庫で置き場をやりくりして用いている状態である。今回のような大きな作品も、そのまま保管する場所も無く、展示後は解体しなければならない。世界中にある美術館に展示されるような作品とは異なり、多くの労力を費やして作っても、一瞬だけの存在である。しかし、企画から制作、展示、発信を含めた全てが作品の一部であり、解体作業もそれらに含まれるものとして、肯定的に捉えたい。生徒へはその作業までを含めて活動を全うさせる意識や態度を身につけさせることが大切である。

今回の作品制作に関わった人々の心の中には、作品に対する受けとめが様々な形で残り続けると思われる。全くの無から目に見えるもの、形あるものを作り出し、多様な価値観で共有することこそが芸術の力であり、人々を励ます力になるのだと信じたい。

〔参考文献〕

文部科学省(2018)『【総則編】高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説』

筑波大学附属聴覚特別支援学校高等部普通科(2020) 2020美術部文化祭企画 http://www.deaf-.tsukuba.ac.jp/futuuka/nav/topic/2020/20201030.html

〔付記〕本研究は筑波大学附属聴覚特別支援学校研究倫理審査委員会の承認を得ている。